



自己愛に関する最近の研究動向(調査実証研究を中心に)

相澤, 直樹

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 14(1):109-123

(Issue Date)

2006-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000676>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000676>



自己愛に関する最近の研究動向（調査実証研究を中心に）

Recent research trend concerning narcissism

相澤直樹*

Naoki AIZAWA*

要約：本研究の目的は、最近の自己愛関連の研究動向を検討することにある。おおむね過去10年間にわたる心理学、精神医学関連の文献を振り返ったところ、主要な研究テーマとしては、DSMの自己愛性人格障害診断基準の信頼性と妥当性に関する研究、自己愛に関する尺度法研究、他の心的障害との関連に関する研究、自己愛の下位類型に関する研究、他の心的傾向との関連に関する研究、自己愛の規定因に関する研究、自己愛と対人関係に関する研究、投影法を用いた研究が見受けられた。また、最近の研究動向としては、自己愛人格障害診断基準の研究の中で他の人格障害や心的障害との共存性を指摘する研究が見られたこと、他の心的障害との関連に関する研究の中では、摂食障害と自己愛の関連を取り扱ったものが多く見られたこと、他の心的傾向との関連に関する研究の中では、怒りや攻撃性と自己愛の関連を取り扱ったものが多く見られたことなどがあげられた。

1. はじめに

自己愛 (narcissism) に関する研究は、1960年代～70年代にかけて自己愛性人格障害の研究を中心に一つの最盛期を迎えたものと思われる。その中で、KernbergやKohutといった研究者がその理論的基礎を提示し、今日においてもその有効性を発揮している。それ以来、自己愛に関する諸研究は、人格障害に限定した問題としてのみならず、広く一般的な人間の心性に関するものも含めて幅広く展開してきたものと予想される。そして、時代的推移もはらんでさまざまな変遷を見せてきたものと思われる。

そこで、本稿では、自己愛に関する実証的研究 (empirical studies) の今日的動向を探ることを目的とする。おおむね過去10年間にわたる精神医学、心理学関連の文献を振り返り、各テーマにしたがっていくつかに分けて取り上げる。そして、その中から自己愛研究に関する今日的な動向が見出されることを目指す。なお、テーマの区分にあたっては、いくつかの分野に重複している研究や複数の目的で行われている研究などが多く、明確な区分けが困難な場合が少なくなかった。そこで、そのような場合には、主な研究テーマにしたがって分類を行った。また、より広範な研究主題の一部として自己愛の問題が取り上げられている場合が多く見られた (代表的なものとしては、人格障害全般の診断学的研究の中で自己愛性人格障害が取り上げられている場合)。その際には、全体の研究については簡単に触れるにとどめ、特に自己愛に関する結果を中心に取り上げた。その他、このようなレビューを行ううえで常に問題となる困難の一

つとして統計的手法の多様さがあげられる。おのおのの統計手法によって結果の意味や性質もおのずと異なってくるので、このことは重要な要素であると思われる。しかし、本稿は、自己愛に関する最近の研究動向に焦点をあてるものであり、かつ、紙枚の限界もあるため、おのおの研究で用いられている統計手法に関する記述は最小限にとどめ、主に各研究の内容面を中心に取り上げることとした。

2. DSM診断基準の信頼性・妥当性に関する研究

自己愛性人格障害に関する諸研究の中で、一つの明確な領域を形成しているのがその診断基準の信頼性と妥当性に関するものである。特に、DSM-IIIにおいて人格障害の診断基準が明確化されて以来、この分野では多くの研究が継続して行われてきている。今日に至ってもその動向に変化はなく、以下のような研究が見られる。

Blais, Hilsenroth, & Castlebury (1997) は、DSM-IVにおける境界性人格障害と自己愛性人格障害の診断基準の妥当性に関する研究を行っている。一連の大規模な人格障害研究の一環として、多数の過去の患者の臨床資料 (初診記録、生育歴、面接記録など) を回顧的に検討する方法を用い、臨床専門家が境界性と自己愛性人格障害の診断基準項目の有無を判定している。そして、その結果に対し主成分分析を実施したところ、境界性人格障害では、仮定された4因子構造に対してほぼ内容的に一致する3因子構造を抽出し、自己愛性人格障害では、仮定されたとおりの3因子構造を抽出している。そして、以上の結果から、前者ではおおむね診断基準の妥当性が確認され、後者では診断基準の妥当性が強く支持されたとしている。

* 神戸大学大学院総合人間科学研究科講師

(2006年4月1日 受付)
(2006年4月1日 受理)

また、Zanarini, Skodol, Bender, Dolan, Sanislow, Schaefer, Morey, Grilo, Shea, McGlashan, & Gunderson (2000) は、DSM-IVの診断基準の妥当性を検討するため、Structured Clinical Interview for DSM-IV Axis I Disorders (First, Spitzer, Gibbon, & Williams, 1996) と Diagnostic Interview for DSM-IV Personality Disorders を用いて、評定者間ならびに再検査信頼性を検討している。その結果、I軸診断II軸診断ともに概ね優れた一致度を示したことが、また、II軸診断ではカテゴリー評定よりも量的評定（当てはまる診断基準の数）の方が高い信頼性を示したことを報告している。自己愛性人格障害については、カテゴリー評定では度数の少なさから信頼し得る値とはなっていないようであるが、量的評定では高い評定者間ならびに再検査信頼性が得られている。また、Fossati, Beauchaine, Grazioli, Carretta, Cortinovis, & Maffei(2005)は、病院外来・通院患者を対象に、Structured Clinical Interview for DSM-IV Axis II Personality Disorders, Version 2.0 (First, Spitzer, Gibbon, Williams, & Benjamin, 1994) と人格質問項目 (the SCID-II) を実施し、自己愛性人格障害の診断基準の妥当性を検討している。その結果、自己愛性人格障害の診断基準が、従来の研究で一部示唆されてきた“顕在的 (overt)”と“潜在的 (covert)”の分類に相当する2因子構造で説明されうること、類型記述が妥当であること、一般健常群の自己愛的傾向とは区別されうること、ならびに、他の人格障害との弁別性が見られることなどを示唆する結果を得ている。Westen, Shedler, Durrett, Glass, & Martens (2003) は、青年を対象とした際のDSM-IVの人格障害診断基準の妥当性と、実証経験に基づく診断分類の可能性を探索する研究を行っている。臨床実践家に対し、青年期の特定の患者に対するDSM-IV人格障害診断基準にもとづく評定（カテゴリー評定と量的評定）、Qソート法による人格障害特性の評価 (Scheduler-Western Assessment Procedure-200 for Adolescent)、ならびに、適応機能や行動に関する質問項目を実施している。そして、DSM-IV診断基準評定による頻度や質問項目との関連から、青年期においても成人と同様の診断分類が可能であることを示唆するとともに、Qソート法による結果から5つの分類（反社会性-精神病質、感情非統制、回避-抑制、自己愛性、演技性）を抽出し、それに基づくより適正な診断分類の可能性を示唆している。以上の研究では、DSMの自己愛性人格障害の診断基準について一定の信頼性と妥当性が確認されていると言える。

ただ、その一方で、他の心的障害や人格障害との重複や共通性などを指摘する研究も少なくない。

Watson & Sinha (1998) は、DSM-IVの人格障害の共存度を検討するために、多数の一般大学生を対象にCoolidge Axis II Inventory (Coolidge & Merwin, 1992) を実施している。そして、各人格障害得点の高得点者の重複度を算出したところ、A群人格障害においては比較的低い重複度が見られたのに対し、B群人格障害においては相当程度の重複度が見られたこと、また、自己愛性人格障害については、演技性、妄想性、ならびに、受動-攻撃性人格障害との間で中程度から高度の重複度が見られたことを報告している。また、Holdwick Jr, Hilsenroth, Castlebury, & Blais (1998) は、反社会性人格障害と境界性人格障害、ならびに、自己愛性人格障害の診断基準特性の独自性と共通性を検討するため、過去の外来患者の初診

記録や面接記録をもとにした回顧的研究を行っている。そして、各人格障害群別にDSM-IVの診断基準特性の出現頻度を比較した結果、診断基準特性によって、他の人格障害すべてと有意差があるものと、特定の人格障害との間のみ有意差のあるものが見られたことを報告している。自己愛性人格障害については、概ね“誇大さ”や“独自性”、“特権性”などの診断基準では他のすべての人格障害と有意差が見られ、この人格障害に独自の診断基準特性であると考えられたが、一方で、“理想化”や“搾取性”、ならびに、“共感性の欠如”などでは特定の人格障害との間のみ有意差が見られ、他の人格障害と共通する要因でもあることが示唆された。Stuart, Pfohl, Battaglia, Bellodi, Grove, & Cadoret (1998) は、人格障害の共存性を検討するため、Structured Interview for DSM-III Personality Disorders revised for DSM-III-R (Stangl, Pfohl, Zimmerman, Bowers, & Corenthal, 1985) を実施している複数の大学施設や病院から、多数の診断結果資料を収集している。そして、各人格障害に対応させて検討したところ、ほとんどの人格障害でかなりの共存度が見られたことを報告している。自己愛性人格障害においても、演技性人格障害を代表に妄想性、境界性、依存性、受動性-攻撃性、加虐性人格障害との間で有意な共存度が見いだされている。Gunderson & Ronningstam (2001) は、それぞれ自己愛的人格障害と反社会性人格障害と診断された外来・入院患者を対象に、Semistructured Diagnostic Interview for Narcissism (DIN: Gunderson, Ronningstam, & Bodkin, 1990) を実施している。そして、平均値の差の検定、判別分析を通じて、両人格障害に主に誇大性領域における有意な差を見るときともに、他の下位領域（対人関係、反応性、気分状態）では有意な差が見られなかったこと、主に誇大性領域の“独自性”、“誇張”、ならびに、対人関係領域の“搾取性”に両群を区分する要因が見られることなどを見出し、これらの結果から両診断分類を区別することへの疑問を呈している。Blais (1997) は、臨床専門家を対象に、担当患者に関するDSM-IV人格障害診断基準とFive-Factor Model for Personality簡略版 (FFM: Goldberg, 1992, Saucier, 1994) による評定を求め、その結果からFFM尺度の“外向性”、“神経質”、“協調性”と各人格障害評定との間に有意な正負の相関を得ている。また、両者を含めた因子分析から“感情的反応性”、“非協調性”、“社交性”、“感情的健康さ”の4因子構造を見だし、それらを人格障害に共通する要因として検討している。自己愛性人格障害に関しては、FFM尺度の“外向性”と正の関係に、“協調性”と負の関係にあること、ならびに、因子分析の結果では“社交性”因子との間に最も強い正の関係が見られたことを報告している。

あるいはまた、自己愛性人格障害の症状に、比較的短期的な変化を見出している研究もいくつか見られる。

Ronningstam, Gunderson, & Lyons (1995) は、自己愛性人格障害の診断を受けた患者に対し、3年間の変化を検討する研究を行っている。基準時点と再評価時点との間で比較を行った結果、変化が見られなかったのは、Semistructured Diagnostic Interview for Narcissism (DIN: Gunderson, Ronningstam, Bodkin 1990) の診断基準においては15名中5名に、DSM-III-Rの診断基準においては12名中6名に、また、DSM-IVの診断基準では13名中6名にとどまった

ことを報告している。そして、全対象患者について、DINの全体得点と5つの下位領域得点（誇大性、対人関係、反応性、感情状態、社会・道徳的適応）の平均得点の変化を検討したところ、その全てで有意な低下が見られたこと、また、下位特性ごとに見ると、“優越性”と“脱価値化／侮辱”で特に有意な平均値の低下が見られたこと、さらには、3年間の変化として聴取した出来事を分析すると、改善に寄与した要因は、“現実的達成”、“意義のある持続的な関係の確立”、“脱幻想体験”にまとめられることを示している。あるいは、Grilo, Becker, Edell, & McGlashan (2001) は、青年期におけるDSM-III-Rの人格障害の安定性を検討するため、青年の入院患者に対し、入院時とその2年後に半構造化面接であるPersonality Disorder Examination (Loranger, 1988) を実施し比較している。その結果、11の人格障害のうち5つで有意ではあるが中程度の正の関係を見だし、また、5つの人格障害で有意な平均値の低下を見ている。自己愛性人格障害に関しては、入院時とその2年後で弱い正の関係しかみられなかったものの、平均値の変化は見られなかったとしている。そして、以上の結果から、量的診断を用いた場合、青年期における人格障害では弱い、ないしは、中程度の安定性しか見られなかったとしている。

3. 自己愛に関する尺度法研究

以上のようなDSMの診断基準に関する研究と並んで、もう一つしばしば報告されているのが自己愛に関する尺度法研究である。Raskin 他 (1979, 1988) によるNarcissistic Personality Inventory (NPI) の作成以来、この分野でも多くの先行研究がなされてきたが、今日においてもなお探求されている。まず、中でも、既存尺度に対する信頼性、妥当性を検討するものとしては以下のものが見られる。

Rathvon & Holmstrom (1996) は、NPIとMMPI由来の自己愛関連尺度との関連を検討するため、一般大学生を対象にNPI, Pepper & Strong's Ego-Sensitivity Scale, Serkownek's Narcissism-Hypersensitivity Scale, Ashby & Lee's Narcissistic Personality Disorder Scale, Narcissistic Personality Disorder Scale (Morey, Waugh, & Blashfield, 1985), ならびに、Narcissism Scale (Wink & Gough, 1990) を実施している。そして、それらの総得点に対し因子分析を施し、2因子構造（自己愛的衰弱、自己愛的誇大性）を抽出している。また、それらの因子と各尺度について、MMPI-2の妥当性尺度、臨床尺度、補助的尺度との間の関連を検討し、概ね2つの因子ならびに各因子と強い関係を持つ自己愛関連尺度で異なった関連のパターンを見ている。最終的に、各因子ならびに各尺度高得点者群に特徴的なMMPI-2コードを検討し、主に“自己愛的衰弱”因子高得点者には87/78コードを、“自己愛的誇大性”因子高得点者には98/89あるいは96/69コードをそれぞれ典型的なものとしている。Soyer, Rovenpor, Kopelman, Mullins, & Watson (2001) は、自己愛性人格傾向関連の既存尺度であるNPI, Margoris & Thomas's Measure of Narcissism(MT), Ashby & Lee's Narcissistic Personality Disorder Scale (NPDS), ならびに、Serkownek's Narcissism-Hypersensitivity subscale of MMPI (NHMF) の妥当性を検討するため、一般社会人を対象に上記の尺度、および、その関連尺度（主に、Machiavellianism IV Scale, Christie & Geis, 1970 ;

Manifest Needs Questionnaire, Steers & Braumstein, 1976 ; Rosenberg's Self-Satisfaction Measure, Rosenberg, 1965) を実施している。その結果、MTにその他の自己愛尺度、および、関連尺度との間で最も妥当な関連を見出し (NPI, MPDS, NHMF, マキャベリズム傾向との正の相関、ならびに、人生満足度、自己満足度、職業満足度、家庭満足度との間に負の相関)、その妥当性を確認している。また、NPIの下位尺度ごとの関連を検討することで、主にNPI下位尺度の“権威性”“自己満足”が自己愛的傾向の適応的側面を測定していること、また、“搾取性”“特権性”が不適応的側面を測定していることを示唆している。Jones (2005) は、従来MMPIの人格障害尺度として妥当性があるとされてきたMorey et al. (1985) のものに対して、新たに作成されているMMPIならびにMMPI-2由来の2つの人格障害尺度、Levitt & Gotts's Personality Disorder Scales (Levitt & Gotts, 1995) とSomwaru & Ben-Porath's Personality Disorder Scalesの有用性を検証する研究を行っている。その結果、自己愛性人格に関しては、MCMI-IIとの関わりにおいて、Levitt & Gottの尺度が有意である一方で信頼性に問題が見られること、Somwaru & Ben-Porathの尺度は信頼性がある一方で有意な関連が認められないことを報告している。

以上に加えて、特徴的なものとしては、尺度法における自己評定と他者評定の関連を検討した研究がいくつか見られる。

Miller, Pilkonis, & Clifton (2005) は、さまざまな人格障害と尺度法による自己評定および他者評定との関係を検討している。入院・外来患者を対象に、Neo-Personality Inventory (Costa & McCrae, 1985) を実施するとともに、その重要な他者に対しても本人に関する同Inventoryを実施し、かつ、いくつかの手法による構造化面接をもとにDSM-III-Rの人格障害基準を判定している。そして、各人格障害判定とNeo-Personality Inventory (5つの領域、すなわち、神経症傾向、拡大性、開示性、調和性、意識性と下位の24側面からなる) の自己評定得点ならびに他者評定得点のそれぞれの相関を検討するとともに、各人格障害評定点を予測する上で、Neo-Personality Inventoryの自己評定得点、他者評定得点の有効性を検討している。その結果、自己愛性人格障害については、自己評価と他者評価に相関係数のパターンに大きな違いが見られ、自己評価では“主張的で活動的、特権的”とみなしているにもかかわらず、他者評価ではむしろ“抑うつ的で恥や当惑に敏感で…疑い深く搾取的である”とみなされているとしている。また、他者評定が人格障害判定を予測する上で、優位な効果を示さなかったことも報告している。Oltmanns, Gleason, Klonsky, Turkheimer (2005) は、空軍訓練の中で一定期間共同生活を行った健常者を対象に、DSM-IVの人格障害診断基準に基づいて作成された質問項目群であるMultiple-Source Assessment of Personality Pathologyを、自己評定、予測された他者からの評定、実際の他者からの評定のそれぞれの形式で実施し、それらの関係を検討している。その結果、いずれの人格障害においても、実際の他者からの評定を予測する上で、予測された他者からの評定が有意な正の効果を示し、自己評定は弱い負の効果しか示さなかったことから（自己愛人格の場合も同様）、自己認知の媒介的役割を考察するとともに、自己評定による測定の妥当性に疑問を呈している。

また、この分野では新たな尺度開発の研究も散見される。

葛西 (1999) は、一般大学生に対しLapan & Patton (1986) による自己愛尺度の邦訳版を実施し、日本人における因子構造を検討している。その結果、因子分析でLapan & Pattonと同様の2因子構造を確認するとともに、“自己誇大感”に関する側面で欧米とは異なる日本的な自己誇大感の満たし方が見られる可能性が示唆されたことで、新たな尺度作成に取り組んでいる。そして、“他者からの依存・尊重の拒否”と“他者からの賞賛への不信・不満”の2因子構造からなる日本版“誇大感”欲求尺度を作成し、その信頼性と弁別的妥当性を検討している。小塩 (2004) は、NPIの因子構造と信頼性、妥当性を検討するために、一般大学生を対象にNPIとSNPI (佐方, 1986), MNPI (Murrey, 1938 外林訳 1961) を実施している。その結果、NPIに3因子構造 (優越感・有能感, 注目・賞賛欲求, 自己主張性) を見いだすとともに、SNPIならびにMNPIと有意な正の関係を検証している。さらに、NPIに難解な表現が含まれることなどからより平易な尺度が必要であると考え、NPIをもとに30項目からなる尺度項目群を作成し (NPI-S), 同様の3因子構造を抽出するとともに、内的一貫性, 再検査信頼性を確認している。また、NPI-Sの妥当性を検討するため、NPIとSNPIを同時に実施し、それぞれの関係に有意な正の相関を見いだしている。

4. 他の心的障害との関連に関する研究

一方、自己愛の問題は、他の心的障害との関連がしばしば指摘されている。特に摂食障害との関連を取り上げる研究が目立って見受けられる。

Steiger, Jabalpurwala, Champagne, & Stotland. (1997) は、摂食障害における自己愛の働きを検討するため、摂食障害患者 (拒食型, 過食-排出型, 過食型を含む), (摂食障害以外の) 精神科患者, ならびに、一般女子大学生を比較する研究を行っている。Dimensional Assessment for Personality pathology (Livesley, Jackson, & Schroeder, 1989) の5つの下位尺度 (自己愛, 刺激探求, 情緒不安定, 強迫性, 感情抑制) について各群間の比較を行った結果、摂食障害患者とその他の群との間で有意差が見られたのは“自己愛”のみであった。一方、その他の下位尺度では、“情緒不安定”で摂食障害患者全体および精神科患者と一般大学生との間で有意差が見られ、“感情抑制”と“強迫性”は拒食症患者が最も高く示し、“刺激探求”は過食-排出患者が最も高く示していた。以上の結果から摂食障害全般に対する自己愛の役割の重要性を指摘している。Steinberg & Shaw (1997) は、過食障害と自己愛の障害との関係を検討するため、一般女子大学生を対象に、Bulimia Test Revised (Smith & Thelen, 1984), Eating Disorder Inventory-2 (Garner, 1991), ならびにKohut理論から自己愛の障害に関連すると推定された自尊感情と自己鎮静能力 (capacity to self-soothe) を測定する尺度 (Multidimensional Self-Esteem Inventory, O'Brien & Epstein, 1988; Self-Care Questionnaire, Pearlman, 1988; Bellak's Ego Functioning Questionnaire, Bellak & Goldsmith, 1984) を実施している。その結果、自尊感情尺度と自己鎮静能力尺度の間に有意な高い正の相関を見出し、これらが一つの心理的要素に関連しているとの仮説を支持する結果を得るとともに、過食障害関連の各尺度との間で有意な負の相関を見出し、自尊感情と自己鎮静能力

の低さが過食障害と関連があることを示唆している。Lehoux, Steiger, Jabapurlawa (2000) は、現在症状のある女性過食症患者、現在過食の治まっている女性の過食症患者、過去にも現在にも過食行動の見られない一般女性のそれぞれに対し、Beck Depression Inventory (BDI: Beck & Steer., 1984) とDimensional Assessment for Personality Pathology (DAPP: Livesley, Jackson, & Schroeder, 1989) の6下位尺度 (自己愛, 刺激探求, 不安, 強迫性, 感情抑制, 自虐性) を実施し、それぞれの群を判別する要因を検討している。その結果、現在症状のある過食症患者とそれ以外を区別する要因として、BDIとDAPP下位尺度の“不安”“自虐念慮”“感情抑制”に有意な正の関係を見だし、これらを過食症の規定する“状況要因”としている。そして、過食行動の見られない一般女性とそれ以外を判別する要因としてDAPP下位尺度の“自己愛”にのみ有意な値を見だし、これを過食症を規定する“特性要因”と見なしている。そして、以上の結果から、自己愛を過食行動の存否に関わらず過食症を規定する特性要因として考察している。Brunton, Lacey, & Waller (2005) は、摂食障害傾向と自己愛, ならびに、境界性傾向の関係を検討するため、病院の医学生女子を対象に質問紙調査を実施している。その結果、Eating Disorders Inventory の“やせ願望”下位尺度とO'Brien Multiphasic Narcissistic Inventory (O'Brien, 1987) の“抑制的自己愛”との間に、また、前者の“過食”下位尺度と後者の“自己愛性人格障害”下位尺度, ならびに、Borderline Symptom Inventory (Conte, Plutchik, Karasu, & Jerrett, 1980) の間に、それぞれ正の相関関係を見出している。そして以上の結果から、拒食型の摂食障害と過食型の摂食障害の人格特性上の違いを論じている。

以上のように摂食障害との関連を検討する研究が多数見られたが、そのほかにも気分障害, PTSDとの関係に関する以下のような研究が見られた。

Sato, Sakado, Uehara, Narita, & Hirano (1999) は、うつ病の初発年齢と人格障害の関係を検討するため、早期初発 (23歳より前) のうつ病患者と後期初発 (23歳以降) のうつ病患者に対し、Structured Clinical Interview for DSM-III-R Personality Disorders (Spitzer, Williams, Gibbon, & First, 1990) を実施している。そして、性別・年齢を統制した分析を用いて、両群におけるDSMの人格障害の出現頻度を検討している。そして、人格障害全体としては、早期初発群の方が後期初発群よりも人格障害の出現が広範囲に見られるとともに、自己愛人格障害についても、早期初発群の方が後期初発群よりも多く見られる傾向があることを示唆する結果を得ている。Stormberg, Ronningstam, Gunderson, & Tohen (1998) は、双極性障害患者の躁状態時と安定時, 自己愛性人格障害患者, ならびに、他の心的疾患患者を対象に、Semistructured Diagnostic Interview for Narcissism (DIN: Gunderson et al., 1990) を実施し、その得点を比較している。その結果、DIN総得点では、双極性障害患者の安定時では、自己愛性人格障害患者よりも低く、他の心的疾患患者とは有意な差が見られなかったのに対し、躁状態時では、自己愛性人格障害との有意な差が見られず、他の疾患患者よりも高い値を示したことが、また、DIN下位領域では、“誇大性”で同様の結果が見られたことを報告している。さらに、10個の下位項目で比較したとこ

ろ、安定時ではほとんどすべての下位項目で自己愛人格障害患者よりも低い値が得られたのに対し、躁状態時では、“賞賛欲求”と“羨望”の下位項目以外で同程度の値が得られたことを見ている。以上の結果から、自己愛性人格障害の鑑別診断に躁状態の影響を考慮する必要があることを示唆している。Carter, Joyce, Mulder, Sullivan, & Luty (1999) は、抑うつ外来患者における人格障害の男女差を比較する研究を行っている。Structured Clinical Interview for DSM-III-R Personality Disorders (Spitzer, et al., 1990) を用いて人格障害の診断を行い、男女差の検討したところ、カテゴリー診断単位で見れば、男性で女性よりも失調型、妄想性、自己愛性、境界性、反社会性、強迫性人格障害が高頻度に見られたこと、また、量的評定（合致する診断基準数）で見れば、男性で女性よりも失調質、失調型、自己愛性、反社会性、強迫性人格障害が高頻度に見られたことを報告している。また、Bachar, Hadar, & Shalev (2005) は、イスラエルの研究で、自己愛性傷つきやすさとPTSDとの関係を検討している。救急処置室に入室した一般人を対象に、Narcissistic Vulnerability Scale (NVS), Beck Depression Inventory (Beck & Steer, 1984), ならびに、構造化面接法であるClinical-Administered PTSD Scale (Blake, Weathers, Nagy, Kaloupek, Gusman, Charney, & Keane, 1995), その他トラウマ体験を測定する尺度を一定期間ごと（出来事の1週間後, 1ヵ月後, 4ヶ月後）にそれぞれ実施している。その結果、構造化面接でPTSDの兆候が見られた人ほど、事前に測定された自己愛性傷つきやすさが高く見られたこと、また、PTSDを予測する上で自己愛性傷つきやすさが有意であることを示唆する結果を得ている。

5. 自己愛の下位類型に関する研究

自己愛の下位類型を論じる研究もいくつか見受けられた。特に、従来指摘されてきたような、誇大的で自己主張的な類型と過敏で自己抑制的な類型を取り扱う研究が見受けられる。以下にそれを取り上げる。

Sturman (2000) は、適応的自己愛、不適応的自己愛、潜在的自己愛の3つの自己愛特性と動機ならびに社会的活動との関係を検討している。一般大学生を対象に、NPIの下位尺度のうち“リーダーシップ/権威”、“優越性/尊大さ”、および、“自己没頭/自己賞賛”を適応的自己愛、“搾取性/特権性”を不適応的自己愛、Serkownek's Narcissism-Hypersensitivity ScaleとPepper & Strong's Ego-Sensitivity Scale を潜在的自己愛を測定する尺度項目として用い、それらとTATから得られた3つの動機評定（勢力動機、達成動機、所属動機）、ならびに、Personality Research Form (Jackson, 1974) の同様の下位尺度（支配、達成、所属）を実施している。そして、それらの相関係数を検討し、適応的自己愛のNPI下位尺度とPersonality Research Formの“支配性”との間に有意な正の関係を、不適応的自己愛のNPI下位尺度とPersonality Research Formの“支配性”との間に有意な正の関係を、“所属性”との間に有意な負の相関を見出している。さらに、潜在的自己愛の2つの尺度とPersonality Research Formの“所属性”との間で有意な負の相関を見ている。また、TATの動機評定と一致して作成された日常活動尺度もあわせて実施し、主に適応的自己愛のNPI下位尺度と“勢力活動”との間で有意な正の相関を見ている。そして、以上の

結果から、不適応的自己愛と潜在的自己愛について所属動機の不調としての観点からの考察を行っている。清水・海塚 (2002) は、対人恐怖心性と自己愛的傾向の関連を検討するため、NPI-S (小塩, 1998) と対人恐怖心性尺度 (堀井・小川, 1997) を一般大学生に実施している。そして、それらの男女差を検討するとともに、両者に概ね負の相関が見られることを示している。さらに、対人恐怖心性尺度とNPI-Sを用いて対象を4群（純粋な対人恐怖、過敏型自己愛人格、ふれ合い恐怖的心性、無関心型自己愛人格）に群分し、それぞれの群内における対人恐怖心性と自己愛の関連を検討したところ、過敏型自己愛的傾向と無関心型自己愛的傾向の2群のみで、自己愛的傾向が対人恐怖心性に正の有意な影響を与えていることを見いだしている。また、小塩 (2002, 2004) は、自己愛傾向により青年を分類する試みを行っている。一般大学生を対象に、NPI-S, 対人恐怖尺度 (内田, 1995), 敵意的攻撃インベントリー (秦, 1990) の一部、個人志向性・社会志向性PN尺度 (伊藤, 1995), ならびに、精神健康調査票短縮版 (中川・大房, 1985) を実施している。そして、NPI-Sの3つの下位尺度得点（優越感・有能感、注目・賞賛欲求、自己主張性）に主成分分析を実施して得られた2因子（自己愛総合、注目・賞賛-自己主張）をもとに、被験者を4群に分割している。そして、それぞれの尺度、下位尺度得点を比較した結果、主に、自己愛総合高群が低群よりも、敵意的攻撃インベントリーの“言語的攻撃”、“間接的攻撃”、個人志向性・社会志向性尺度の“個人志向性P”、“社会志向性P”、“個人志向性N”の得点が有意に高く、対人恐怖尺度の“行動因子”が有意に低いことを見いだしている。また同時に、注目・賞賛高群が自己主張高群（＝注目・賞賛低群）よりも、“行動因子”、“間接的攻撃”、“社会志向性P”が有意に高く、一方、“言語的攻撃”、“個人志向性P”、“個人志向性N”が有意に低いことを見いだしている。その他、一部交互作用が見られた結果も合わせて、自己愛総合高群における注目・賞賛優位群と自己主張優位群が、先行研究にある2種類の自己愛に相当するものとしている。相澤 (2002) は、一般大学生を対象に、先行研究の自己愛関連諸尺度と対人恐怖関連諸尺度から新たに項目を収集した自己愛的人格項目群を実施している。そして、因子分析の結果、過敏な特性に相当する4因子（対人過敏、対人消極性、自己萎縮感、自己愛的憤怒）と誇大な特性に相当する3因子（自己誇大感、賞賛願望、権威的操作）を抽出し、YG性格検査との相関を算出してその妥当性を検討している。そして、3つの潜在的因子（誇大自己、萎縮自己、自己愛的傷つきやすさ）が各自己愛特性を規定すると仮定して、そのモデルの妥当性を検討している。また、Dickinson & Pincus (2003) は、一般大学生を対象にNPIを実施し、各下位尺度得点をもとに誇大的自己愛群、過敏的自己愛群、統制群の3群に分類している。そして、Personality Disorder Interview-IV (Widiger, Mangine, Corbitt, Ellis, & Thomas, 1995) を実施し、各群の各人格障害得点（反社会性、回避性、境界性、自己愛性、強迫性、受動-攻撃性）の平均値を検討し、誇大的自己愛群に他群よりも有意に高い“反社会性”、“演技性”、“自己愛性”得点を、過敏的自己愛群に他群よりも有意に高い“回避性”得点を見いだしている。また、対人関係上の問題との関係を検討するためにInventory of Interpersonal Problem-Circumplex Scales (Alden, Wiggins, & Pincus, 1990)

を実施し、誇大的自己愛群では主な対人関係上の問題が“復讐心・執念深さ”にあり、過敏的自己愛群では“冷たさ”にあり、統制群では“搾取性”にあることを見いだしている。その他、成人愛着スタイルとの関係も検討している。Lapsley & Aalsma (2006) は、自己愛関連尺度 (Profile of Narcissistic Disposition, Taylor, 1995 ; “Goal Instability” and “Superiority” Scale, Robbins, 1989) を用いて、クラスター分析を通じて一般大学生を分類する研究を行っている。その結果、顕在的自己愛群、潜在的自己愛群、ならびに、適応的自己愛群の3群を得ている。さらに、心理的健康各尺度 (Measure of Pathology of Separation-Individuation, Christenson & Wilson, 1985等) の平均値を比較し、顕在的自己愛群と潜在的自己愛群に同程度の得点を見出すとともに、適応的自己愛群においてそれよりも有意に低い得点を見いだしている。また、以上の各尺度に自己愛関連尺度としてNPI (Raskin & Terry, 1988) を、心理的健康尺度としてthe Hopkins Symptom Checklist (Derogatis, Lipman, Rickels, Uhlenhuth, & Covi, 1974) を追加して再度調査をおこない、同様の結果を得ている。

6. 他の心的傾向との関連に関する研究

このテーマには、きわめてさまざまな研究課題が見られる。ただし、その中でも特に目立って多く見られるのが怒りや攻撃性に関するものである。以下にまず取り上げる。

Bushman & Baumeister (1998) は、自己愛と自尊感情ならびに攻撃性の関係を検討している。自己愛の尺度としてNPI (Raskin & Terry, 1988) を、自尊感情の尺度として2つの自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965 ; Janis & Field, 1959) を用い、フィードバック (ポジティブとネガティブ) の統制された2つの課題遂行実験を実施して、仮想された評価者に対する攻撃性 (選択されたノイズの大きさや長さをその測度とする) を測定している。その結果、自尊感情と攻撃性の間には有意な関係が見いだせず、主にネガティブフィードバック条件において自己愛と攻撃性の間に正の関係があることを検出している。以上の結果をもとに、攻撃性に関する媒介モデル (自己愛の高さがネガティブな評価を脅威と体験することにつながり、それが怒りを喚起する) を構成し、データに対する高い適合度を検証している。Tedlow, Leslie, Keefe, Alpert, Nierenberg, Rosenbaum, & Fava (1999) は、憤怒発作 (自律神経系の喚起を伴う急激な怒り) を伴う抑うつとDSM-III-RにおけるI軸障害ならびにII軸障害との関係を検討している。Structured Clinical Interview for DSM-III-R (Spitzer, Williams, Gibson, & First, 1989) とHamilton Rating Scale for Depression (Hamilton, 1960) を用いて抑うつ障害の患者を特定し、Anger Attacks Questionnaire (Fava, Rosenbaum, McCarthy, Pava, Steingard, & Bless, 1991) を用いて憤怒発作を伴う群とそうでない群に分類し比較したところ、I軸障害では“パニック発作の発生”に有意傾向の差が見られたのみであったのに対し、II軸障害[Structured Clinical Interview for DSM-III-R Axis II Disorders (Spitzer et al., 1990) にて評定]では回避性、依存性、自己愛性、境界性、反社会性人格障害を示すものがあり、有意に多く見られたことを報告している。Stucke & Sporer (2002) は、自己愛ならびに自己概念の明確さと怒り・攻撃性の関係を検討している。自己愛を測定する尺度にNPIを用い、フィードバック

の統制された実験的課題後の怒り (感情評定) と攻撃性 (実験課題ならびに実験者に対する評価) との関係を検討したところ、自己愛が高く自己概念の明確さが低い被験者がもっとも高い怒り感情と攻撃性を示したとともに、自己愛が低く自己概念の明確さが高い被験者がもっとも高い抑うつ感情を示したことを報告している。Witte, Callahan, & Perez-Lopez, (2002) は、自己愛と怒りの関係を検討するために、一般大学生を対象にNPIとNovaco Anger Scale (Novaco, 1994) を実施している。その結果、後者を予測する上で、NPI下位尺度の“権威性”“特権性”が有意な正の効果を示したのに対して、“自己顕示性”“自己満足”が有意な負の効果を示したことから、自己愛の特定の側面が怒りの感じやすさに関係していることを示唆している。また、Ruiz, Smith, & Rhodewalt (2001) は、NPIと敵意関連尺度 (Buss-Perry Aggression Questionnaire, Buss & Perry, 1992 ; Cook-Medley Hostility Scale, Cook & Medley, 1954), ならびに、Interpersonal Circumplex Scales-Big Five (IASR-B5 : Trapnell & Wiggins, 1990) を用い、一般大学生の自己愛と敵意との関連を検討している。その結果、敵意と攻撃性が主にIASR-B5の“敵意-好意”の軸に関連しているのに対し、自己愛では“リーダーシップ/権威”、“自己没頭/自己賞賛”、“優越性/尊大さ”がIASR-B5の“支配-従属”の軸に関連し、“搾取/特権性”のみが“敵意-好意”の軸に関連があることを見いだしている。そして、自己愛と敵意の異同について考察している。湯川 (2003) は、自己愛傾向と孤立感、ならびに虚構への没入と攻撃性の関係を検討するため、NPI-S (小塩, 1998) の簡略版、新たに作成した対人孤立感尺度、攻撃性質問紙 (安藤・曾我・山崎・嶋田・宇津木・大井・坂井, 1999) の簡略版、ならびに、虚構への没入度測定 (メディア接触量, メディア熱中度) を実施している。その結果、自己愛傾向については、“対人的孤立感”との間に負の関係を見いだすとともに、攻撃性尺度のうちの“短気”、“言語的攻撃”、“身体的攻撃”との間に正の相関を見いだしている。さらに、自己愛傾向が対人的孤立感と虚構への没入もたらし、それが攻撃性に結びつくとの仮説モデルを立て検討している。日比野・湯川・小玉・吉田 (2005) は、怒りの表出行動と抑制要因を検討する中で、言語的表現力とともに自己愛一つの個人内要因と位置づけて研究を行っている。一般中学生を対象に、怒り経験における感情 (怒り, 抑うつ), 認知 (肥大化, 客体化, 自責化, 終息化), 表出行動 (攻撃行動, 社会的共有, 物への転嫁) の測定, 6領域 (友人関係, 家族関係, 学校関係, 規範意識, 自己像, 損得意識) からなる抑制要因の選択解答、ならびに、独自に作成した言語表現能力質問項目とNPI-S (小塩, 1998) の簡略版を実施している。そして、怒り経験の種類, 感情, 認知, 表出行動の男女差を検討するとともに、上記の各変数をもとに怒りの表出行動に関するモデルを作成し、男女ごとにその妥当性を検討している。自己愛に関しては、主に“注目賞賛願望”が“感情体験”を介して、また、“自己主張性”が“終息化認知”を介して、それぞれ表出行動に正の影響を与えていることを示唆している。

以上のような自己愛と怒り、攻撃性との関連に関する研究に類するものとしては、以下に述べるような虐待や危険行動との関連を検討したものが見られる。

Wiehe (2003) は、児童虐待と共感性ならびに自己愛の関係を検

討するため、児童保護部門に訪れた虐待を行う親と（虐待を行わない）里親を対象に、Interpersonal Reactivity Index (Davis, 1983), NPI, Hypersensitivity-Narcissism Scale (HSNS: Hendin & Cheek, 1997) を実施している。両群を比較した結果から、虐待を行う親に共感性を示す尺度でより低い得点を得るとともに、HSNS得点とNPI下位尺度の“自己顕示性”と“特権性”でより高い得点を、NPI下位尺度の“権威性”“優越性”でより低い得点を見だし、また、同じ尺度・下位尺度得点を予測する上での虐待の有無の有意な効果も見だしている。以上の結果から、親が子どもの失敗行動を自分の権威への脅かしと体験することが虐待に結びつくとの考察を行っている。Casillas, & Clark (2002) は、DSMにおけるB群人格障害とアルコール・薬物乱用との関係、ならびに、両者の共通する人格要因の役割を検討するため、一般大学生に対して多数の尺度からなる質問紙調査 (the Schedule for Nonadaptive and Adaptive Personality, Clark, 1993; the Self-Harm Inventory, Sansone, Wiederman, & Sansone, 1998など) を実施している。そして、その主な結果として、衝動性と自傷性が人格障害とアルコール・薬物乱用の両者に共通する要因であることを示唆する結果を得ている。Lavan & Johnson (2002) は、青少年を対象とする医療関連機関に訪れた15歳から18歳の男女を対象に、DSMのI軸障害・II軸障害と危険な性的行動との関係を検討するため、スクリーニング質問紙と構造化面接からなるPrimary Care Evaluation of Mental Disorders Diagnostic System (Spitzer, Williams, Kroenke, Linzer, Gry, Hahn, Brody, & Johnson, 1994), Structured Clinical Interview for DSM-IV Personality Disorders (First, Spitzer, Gibbon, & Williams, 1995), ならびに、Adolescent Health Behavior Survey (Lowry, Holtzman, Truman, Kann, & Collins, & Kolbe, 1994) を実施している。そして、人格障害に関する結果としては、反社会性や依存性人格障害を中心に、その他、妄想性人格障害や強迫性障害の症状を多く示した青少年（特に女性）に（過去1年間ならびにこれまでの人生の中で）性的関係のあったパートナーの数や危険な性行為を行ったパートナーの数が多く見られたことを報告するとともに、自己愛性人格障害については、女性において同様の傾向が一部有意に見られたことを報告している。McCullough, Emmons, Kilpatrick, & Mooney (2003) は、一般大学生を対象にNPI, 日記記録による対人被害尺度, Transgression Occurrences Measure (TOM) を実施し、自己愛と対人被害意識の関係を検討している。その結果、主に、NPIの“搾取/特権性”とTOMの間に正の関係を見だし、自己愛に見られる対人被害意識が特に“搾取性”や“特権意識”で説明されるものとしている。

その他、自己愛と他の心的特性の関連を調べた研究として、以下のようなマキャベリズム傾向、自尊感情、恥と罪悪感、タイプA行動、転移-逆転移感情との関連を検討したものが見られる。

McHoskey (1995) は、自己愛とマキャベリズム傾向の関係を検討するため、2群の一般大学生を対象に、NPIとMach-IV (Christie & Geis, 1970) を実施している。その結果、自己愛の不適應的側面とみなされる“特権性”ならびに“搾取性”とマキャベリズム傾向の間で有意な正の相関が見られたのに対し、適應的側面とみなされる“自己満足”とマキャベリズム傾向の間では負の関係があるこ

とを見出している（ただし、他の変数を統制した結果では、2群に一貫する結果は見られなかった）。Campbell, Rudich, & Sedikides (2002) は、自己愛と自尊感情における自己評価の違いについて検討している。一般大学生にNPIと自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965), および、自己評価を評定する特性項目群を実施し、それらの関係を検討している。そして、主な結果としては、自尊感情の高い人は遂行的志向の特性 (agentic orientation: 知的能力, 外向性), 協調的志向の特性 (communal orientation: 協調性, 良心) とともに肯定的に評価しているのに対し、自己愛的な人は、遂行的志向のみより肯定的な自己評価をしていること、また、前者は恋人に対して否定的な特性がより少ないと評価しているのに対して、後者は、自分よりも肯定的特性が低いと評価していることなどを報告している。Montebarocci, Surcinelli, Baldaro, Trombini, & Rossi (2004) は、自己愛と恥・罪悪感の関係を検討している。一般大学生を対象に、自己愛の測定尺度としてNPIを用い、恥と罪悪感への傾向としてthe Shame-Guilt Proness Scale (Battacchi, Codispoti, & Marano, 1994) を実施して、両者の相関関係を検討している。その結果、おおむね弱い程度の負の相関を検出している。Oashi (2004) は、タイプA行動と自己愛との関係を検討している。一般大学生を対象に、タイプA行動評定尺度 (岡崎・大芦・山崎, 1995) とNPI-S (小塩, 1998) を実施し、前者の“苛立ち・敵意的発言”と後者の“注目・賞賛欲求”, ならびに、前者の“達成欲求・仕事への熱中”と後者の“優越性・有能性”および“自己主張性”との間に、それぞれ有意な正の関係を見出している。Fukunishi, Nakagawa, Nakamura, Li, Hua, Kratz (1996) は、自己愛傾向とタイプA行動、ならびに、家族関係との関係を検討する国際比較研究を行っている。日本人一般大学生、アメリカ人一般大学生、中国人一般大学生に対し、NPI, Jenkins Activity Survey (Jenkins, Roseman, Friedman, 1967), ならびに、Parental Bonding Inventory (Parker, Tupling, & Brown, 1979) を実施したところ、中国人大学生でもっとも高いNPI得点が見られたことを報告している。また、各国被験者に共通して、自己愛とタイプA行動の間に正の関係が見られ、自己愛と母親によるケアとの間には負の関係が、母親による過保護との間には正の関係が見られたことも報告している。Betan, Heim, Conklin, Westen (2005) は、一定の臨床経験を持つ精神科医・心理士を対象に、無作為に選択させた患者に関するCountertransference Questionnaire, ならびに、DSMのII軸診断を実施し、前者に8因子構造 (圧倒/混乱, 無力/不適切, 肯定的, 特別/巻き込まれ, 性的, 無関心, 養育的/保護的, 批判的/被害的) を確認するとともに、A, B, C群人格障害診断との間で仮定された正の関係をみだしている。また、自己愛的人格障害の患者を評定の対象に選択した臨床家が、怒りや恐れ、脱価値化や批判、あるいは、注意の散漫や回避欲求などの逆転移感情を高く報告していることを示している。一方、これと同じ手法を用いて、Bradley, Heim, & Westen (2005) は、患者からの転移感情を測定する質問項目群, Psychotherapy Relationship Questionnaireを臨床家に実施し、その5因子構造 (怒り/特権的, 不安/とらわれ, 安心/参加, 回避/依存への抵抗, 性的) を確認するとともに、A, B, C群人格障害診断との間でほぼ仮説どおりの正の関係をみだしている。また、

自己愛性人格障害の患者を評定対象に選択した臨床家が、患者からの賞賛欲求や特権的取り扱い、理想化と脱理想化の揺れ、当惑などの転移的感情を高く報告していることを示している。

7. 自己愛を規定する諸要因に関する研究

以上述べてきた研究と若干類似するものではあるが、特に自己愛をもたらずさまざまな要因を検討した研究も見られる。それらの中では、外的要因としては家族・環境要因、内的要因としては原因帰属を取り上げているものが見られた。

Eyring III & Sobelman (1996) は、自己愛と出生順位の関係を検討するため、一般大学生にNPIを実施している。そして、長子、次子、末子、一人っ子の各群ごとに平均値を比較したところ、有意な差が得られなかったとしている。Billingham & Cutrera (1997) は、両親の離婚と自己愛の関係を検討するため、一般大学生を対象にNPIを実施している。そして、両親が離婚した群とそうでない群とでは、NPIのすべての下位尺度得点において有意な差が見られなかったこと、また、離婚した年齢による群分けにおいても有意な差が見られなかったことを報告している。Coid (1999) は、重警備病院と刑務所に収監されている男女を対象に、Structured Clinical Interview for DSM-III Axis II disorders (Spitzer & Williams, 1983) を実施するとともに、面接や患者記録から多くの情報を収集した上で、人格障害の病因論的因子を検討している。その結果、各人格障害と第一頭親族の心的障害歴、神経生理的要因、早期環境要因の間に異なった有意な関係を見いだしているが、自己愛性人格障害については、高い知能指数との間に正の関係を、早期環境の貧困さと負の関係を見いだしたのみであった。Ramsey, Watson, Biderman, & Reeves (1996) は、自己愛と認知された養育方法の関係を検討するために、一般大学生を対象にO'Brien Multiphasic Narcissism Inventory (O'Brien, 1987) とParental Authority Questionnaire (Buri, 1989)、ならびに、Combined Parenting Style Index (Dornbusch, Ritter, Leiderman, Roberts, & Fraleigh, 1987) を実施している。その結果、主に放任的な方法 (permissiveness) と権威主義的な方法 (authoritarianism) がともに自己愛傾向を予測する上で有意な効果を持つこと、ならびに、自己愛傾向の高い群が信頼的な養育方法 (authoritativeness) を報告する頻度が有意に少ないことを報告している。

Ladd, Welsh, Vitulli, Labbé, & Law (1997) は、自己愛と原因帰属との関係を検討するため、一般大学生を対象に、NPIとAttributional Style Questionnaire (Peterson, Semmel, von Bayer, Abramson, Metalsky, & Seligman, 1982) を実施している。その結果、男性における自己愛傾向とポジティブな出来事に対する内的帰属との間に有意な正の相関を見だし、また、自己愛が高い群の方がポジティブな出来事の内的帰属が有意に高く、また、ネガティブな出来事については不安定な原意帰属が多いこと、ならびに、男性において、自己愛が高い群の方が、ポジティブな出来事に対しては全般的な原因帰属が、ネガティブな出来事に対する特定的原因帰属が高く見られることを見だしている。また、Rhodewalt & Morf (1998) は、自己愛と原因帰属、ならびに感情的反応の関係を検討している。一般大学生の自己愛性人格傾向を測定する尺度としてNPI短縮版を用い、フィードバックを統制した課題達成実験を実施

して、成功・失敗場面における感情変化 (怒り, 不安, 興味, 自尊感情) に対する自己愛と原因帰属 (能力, 運, 課題の困難さ) の効果を検討している [自己の複雑さ (self-complexity) という要因も導入されているが、これは有意な結果が得られていない]。そして、2回の実験研究結果から、主に自己愛的傾向と原因帰属、ならびに、感情反応に関する時系列関係 (自己愛的傾向が高い人は、最初の成功結果の原因を個人の能力に帰属させる傾向が高いため、次にくる失敗結果が怒りの増加と自己評価の大きな変動につながりやすいという関係) を検証している。Morf, Weir, & Davidov (2000) は、内発的動機づけに対する自己愛的傾向の影響を検討している。一般大学生のNPI高得点者と低得点者を対象に、教示条件 (課題の達成度そのものに関心を与える“達成条件”, 課題の達成が評価されることを伝える“自我関与-曖昧条件”, 課題の達成が評価されること伝えるとともに肯定的な評価を与える“自我関与-肯定条件”) を操作した課題実験を実施し、その際の気分と状態を測定している。その結果、主に、NPI高得点者の男性が“自我関与-肯定条件”で最も高い楽しみと動機づけ、肯定的感情と最も低い不安を示したのに対し、NPI低得点者の男性は、“達成条件”で最も高い楽しみと動機づけ、肯定的感情と最も低い不安を示したことを報告している。それに対して、女性では予想されたような結果が得られなかったとしている。Farwell & Wohlwend-Lloyd (1998) は、自己愛と自己強化との関係を検討するため、NPI (一部はその短縮版) を用いた質問紙研究と実験研究を行っている。前者では、授業成績に関する (長期と短期の) 予測を行わせた結果、自己愛傾向が高い人ほど授業での成績を高く評価し、かつ、実際の成績よりも過大評価する傾向があることが見出さしている。そして、後者では、仮想された共同課題作業において、自己愛的傾向の高い人ほど自分の課題達成度を高く予測し、仲間の課題達成度を低く予測すること、また、課題の成功に対して、自分の能力や努力に原因帰属する傾向が高く、同時に仲間への肯定的感情を減じる傾向があることを報告している。以上の結果から、達成予測と自己評価、ならびに、原因帰属における自己強化過程と自己愛的傾向との関連を論じている。

8. 自己愛と対人関係に関する研究

自己愛の問題は、その他対人関係上に影響を与える要因としても従来重要視されてきた。主な対人領域としては、夫婦関係や友人関係に関するもので、今日においても多く取り上げられている。特に小塩 (1998, 1999, 2002, 2004) による一連の研究は特に際立っている。

小塩 (2004) は、自己愛と友人関係に関する広範な研究を報告している。まず、小塩 (1998, 2004) は、自己愛傾向と自尊感情、ならびに、友人関係との関連を調べるため、NPI-Sと自尊感情尺度、ならびに、岡田 (1993) をもとに作成した友人関係様式に関する質問項目を一般大学生の対象に実施している。そして、主な結果としては、NPIと友人関係様式の間では、自己愛的傾向と友人関係の“気づかい”が負の関係にあり、“積極居る楽しさ”、“自己開示的かわり”、ならびに、(より上位因子の)“(友人関係の)広さ”が正の関係にあるのに対し、自尊感情尺度と友人関係様式の間では、自尊感情と“気づかい”、ならびに、(より上位因子の)“(友人関係の)浅さ”がともに負の関係にあることを見出している。さらに、

友人関係様式の上位因子である“広さ-狭さ”と“浅さ-深さ”の2因子で対象を4群に分割し、それぞれのNPI-S、自尊感情尺度の得点を比較したところ、広い友人関係を報告した2群（“広い-浅い”群と“広い-深い”群）が有意に高い自己愛傾向を示したのに対し、深い友人関係を報告した2群（“広い-深い”群と“狭い-深い”群）が概ね有意に高い自尊感情を示したとしている。以上の結果から、自己愛傾向は友人関係の“広さ”に、自尊感情は友人関係の“深さ”にそれぞれ関連しているものと考察している。また、小塩（1999, 2004）は、自己愛傾向と友人関係の様式をさらに詳しく検討するために、自己愛傾向と友人獲得、ならびに、友人への欲求との関係を検討している。一般高校生を対象に、NPI-Sと独自に作成した友人獲得尺度（親友の獲得、友人集団の獲得の下位尺度からなる）、友人への欲求尺度（理解・評価欲求、関与欲求、過剰関与回避欲求からなる）を実施している。そして、自己愛傾向ごとの群間比較と相関分析から、友人獲得については自己愛傾向との間に正の関係を見いだすとともに、友人への欲求尺度では、理解・評価欲求と関与欲求について自己愛傾向との正の関係を報告している。また、小塩（2004）は、自己愛傾向と異性・恋愛関係との関連についても検討している。まず、一般大学生を対象に、NPI-Sと独自に作成された異性に対する態度尺度（消極的態度、回避的態度、評価懸念からなる）を実施し、主な結果として、NPI-S下位尺度の“優越感・有能感”“自己主張”と異性に対する態度尺度の“消極的態度”“回避的態度”との間でそれぞれ負の相関を見だし、NPI-Sの“注目・賞賛欲求”と“評価懸念”との間で正の相関を見だしている。さらに、同時に、現在の恋愛状況の有無、恋愛関係の特質に関する質問群、Lee's Love Type Scale Second Version (LETS-2: 松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田, 1990)を実施し、それらの関係を検討している。そして、主な結果として、恋愛関係の特質との関連では、NPI-Sの“優越感・有能感”と“相手の熱愛度の認知”との間で有意な正の関係が見られたこと、また、LETS-2との関係では、“Eros的”恋愛意識（恋愛を至上のものと考え、ロマンティックな行動をとる態度）と自己愛的傾向が正の関係にあることを報告している。その他にも、過去の恋愛経験、失恋経験と自己愛傾向との関係を検討する調査も行っている。さらに、小塩（1999, 2004）は、自己愛傾向と自己評定、ならびに、他者評定の関係を検討している。一般高校生男子を対象に、NPI-Sとゲス・フー・テストによる“好意”、“信頼”、“友人数（の多さ）”に関する他者評定を実施し、その結果から、自己愛傾向と他者評価による“好意”、“友人数”に正の関係が見られた一方で、“信頼感”に関する他者評定との間には有意な関係が見られなかったことを報告している。さらに、その点を詳しく検討するため、看護学校生を対象に、NPI-Sと自己評定による他者からの信頼度、ならびに、ゲス・フー・テストによる他者からの信頼度を実施し、それらの関係を検討している。自己評定による信頼度と他者評定による信頼度によって対象を4群に分割し、NPI-Sの得点を比較したところ、概ね、自己評定のみ信頼度が高い群が他者評価のみ高い群と比較して有意に高い自己愛傾向を示したことを報告している。以上の結果から、自己愛傾向が高い人は、他者から信頼されていると自己認識しがちであるが、実際にそのように他者に評価されているとは限らず、その

ことが欲求不満につながる可能性を示唆している。

その他、Ehrenberg, Hunter, & Elterman (1996) は、自己愛、共感性、ならびに、対人関係上の困難が夫婦の離婚後の養育態度に与える影響を検討している。つまり、離婚した夫婦を“（子どもの養育について）同意している元夫婦”と“同意できていない元夫婦”に分けて、NPI, Interpersonal Reactivity Index (Davis, 1983) の3つの下位尺度（パースペクティブ・テイキング、共感的関心、対人困難）、Selfish Scale (Phares & Erskine, 1984), Adult-Adolescent Parenting Inventory (Bavolek, 1984) の3つの下位尺度（子どもへの適度な期待、子どもの欲求への共感、適切な親子役割）、ならびに、新たに作成したSelf-Important Parenting Beliefsを実施し差を検討したところ、“同意できていない元夫婦”の方が有意に高い自己愛と対人困難、自己中心性を、また、有意に低い共感性と子ども重視の養育態度を示したことを報告している。また、以上の諸変数をもとに養育態度に関する媒介モデル（自己愛と対人関係困難がともに共感性と自己中心性に影響を与え、それぞれが子ども中心の養育態度と自己中心的養育態度につながると仮説するモデル）を構成し、その適合度を検証している。また、Carroll, Hoenigmann-Stovall, Whitehead III (1996) は、自己愛の対人関係における影響について検討するため、一般大学生を対象に、仮想された男女（アンとトム）の4種類のNPI結果（特に高得点の結果、特に低得点の結果、中程度の得点の結果、ならびに、“搾取性/特権性”“自己没頭/自己賞賛”下位尺度のみ高得点の結果）を提示し、それに対してInterpersonal Attractiveness Questionnaire (Coyne, 1976, Hammen & Peters, 1978) への評定を求めている。そして、各NPI結果を受け取った群ごとにその差を検討したところ、被験者ならびに仮想された対象者の性別による差異は見られず、特に高得点のNPI結果を受け取った被験者が、他の結果を受け取った被験者よりも対象者への有意に低い魅力と受容を示したことを見出している。角田（1998）は、自己愛的傾向と共感性の関係を検討するため、一般大学生を対象にNPIと共感経験尺度改訂版を実施している。そして、共感経験尺度の2つの下位尺度、“共有経験尺度”と“共感不全経験尺度”により対象を4群（両向型、共有型、両貧型、不全型）に分割し、NPIの各下位尺度（自己愛的欲求、自己愛的確信）の平均値を比較したところ、共有型群が不全型群よりも有意に高い“自己愛的確信”を示したことを報告している。

9. 投影法を用いた研究

最後に、これまでのテーマ分類の観点とは異なるが、投影法心理検査を用いた諸研究を取り上げたい。この領域ではあまり多くの研究は見られなかったが、いくつかの研究が行われている。

まず、ロールシャッハ・テストを用いた研究としては以下のものが見られる。Blais, Hilsenroth, Castlebury, Fowler, & Baity (2001) は、過去の患者の初診資料と事例記録をもとにDSM-IVのB群人格障害と診断しうる患者を対象に、ロールシャッハ・テストとMMPI-2のB群人格障害診断に対する有効性を検討している。経験的理論的先行研究においてExner式によるスコアリングをもとにB群人格障害との関係が推測されるロールシャッハ変数を取り上げ、また、MMPI-2の人格障害下位尺度（重複項目版と非重複項目版）を用いて、B群人格障害診断に対する部分的に有意な効果を見いだ

すとともに、自己愛性人格障害については、ロールシャッハ変数の反射反応 (Reflection) とMMPI-2重複項目版の自己愛性人格尺度の有意な効果を見いだしている。

その他、TATを用いた研究としては、以下のものが見られる。Ackerman, Clemence, Weatherill, & Hilsenroth (1999) は、TATにおけるSocial Cognition and Object Relations Scale (SCOR: TATの内容分析に基づいて予め定められた基準に従って8つの得点を算出するもの) のB群人格障害の査定に関する妥当性を検討する研究を行っている。人格障害に関する大規模な研究の一環として得られた患者の臨床資料を回顧的に検討して人格障害に該当する患者 (TATとMMPI-2の記録を備えている) を抽出し、その中から、TATの5つの図版 (1, 2, 3 BM, 4, 13MF) に対するテスト結果をもとにSCORの各得点 [(人物表象の) 複雑さ, 感情性質, 関係性, 価値観・道徳性, (社会的) 文脈の理解, 攻撃性 (の経験と統制), 自尊感情] を算出している。そして、それらとB群人格障害のカテゴリー診断, ならびに, 量的評定, MMPI-2のPersonality Disorder Scalesの関係を検討している。自己愛性人格障害については、その診断を受けた患者がSCORの各得点で概ね境界性よりも有意に高い得点を示しC群人格障害よりも有意に低い得点を示すこと, また, 自己愛性人格障害の量的評定を予測する上で, SCORの“自尊感情”得点がある正の効果, “価値観・道徳性”得点がある負の効果を持つことなどを報告している。Cramer (1999) は、人格と認知発達との縦断的研究に参加している一般者に対して、California Adult Q-setを用いた面接者評定から各人格障害症候群得点 (自己愛性, 境界性, 演技性, 精神病質) を算出し、一方で、TATの記録をThe Defense Mechanism Manual (Clamer, 1987) を用いて算出した各防衛機制得点 (否認機制, 投影機制, 同一視機制, および、それぞれの未成熟型と成熟型) との関係を検討している。その結果、相関係数を用いて否認機制ならびに投影機制との有意な関係を見だし、また、重回帰分析を用いて未成熟型の投影機制の有意な効果を見いだしている。

10. 終わりに

以上のように、最近の自己愛に関する研究動向を概観してきた。その結果、非常に広範なテーマで自己愛に関する研究が行われていることが明らかとなった。その中で、特に際立った動向としては以下のものがあげられる。

まず、DSMによる自己愛性人格障害診断基準に関する妥当性研究である。そして、いくつかの研究でその妥当性が確認されている。ただ、同時に印象的なのは、他の人格障害との共存や変化を指摘している研究が少なからず見られることである。DSM-IVの診断基準は、2つ以上の人格障害診断の並存を認めているし、また、一定期間後の変化も実質的には当然生じうるものと思われるので、それが妥当性の問題に直接結びつくとは必ずしも言えないと思われる。ただし、それらの間に何らかの共存性が見られるのであれば、それは、その背景にある内面的な要因に目を向けることの重要性を示唆しているように思われる。もう一つ、他の心的障害との関係では、摂食障害との関連がしばしば取り上げられていることがあげられる。特に過食行動と自己愛との関連について有意な関連を示唆する研究が積み重ねられている。また、他の心的傾向との関連では、特に怒り

や攻撃性と自己愛の関連を検討する研究が多数見られた。これは、従来あまり見受けられなかった特徴であると思われる。かなり推測の度合いは高くなるが、この点には今日的な社会情勢として攻撃的行動や虐待などの問題が増加してきていることを反映しているのではないかと考えられる。そして、一部有意な関係も見出されているようである。ただし、このような特にネガティブなテーマに関わる研究は、それらの関係を結果的に示すのみでは、自己愛そのものをネガティブなものとして位置づけざるを得ないので、その有効性はかなり限定されたものとならざるを得ないものと思われる。自己愛や自己愛性人格障害、自己愛的傾向に関する理解が伴う必要があると思われる。また、自己愛の下位類型を指摘する研究もいくつか見受けられた。これらの研究にも自己愛性人格障害診断基準に関する研究と同様のことが言えると思われる。最後に、特に自己愛の問題については、友人関係や恋愛関係などの関係を取り上げた研究も多く見受けられた。このことは、自己愛が、一部の心的障害に限らず広く人の行動や生活にかかわりを持つ問題であることを示唆していると思われる。

引用文献

- Ackerman, S. J., Clemence, A. J., Weatherill, R., & Hilsenroth, M. J. (1999). Use of the TAT in the assessment of DSM-IV cluster B personality disorders. *Journal of Personality Assessment*, **73**, 422-448.
- 相澤直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性. *教育心理学研究*, **50**, 215-224.
- Bachar, E., Hadar, H., & Shalev, A. H. (2005). Narcissistic Vulnerability and the development of PTSD: A prospective study. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **193**, 762-765.
- Betan, E., Heim, A. K., Conklin, C. Z., & Westen, D. (2005). Countertransference phenomena and personality pathology in clinical practice: An empirical investigation. *American Journal of Psychiatry*, **162**, 890-898.
- Billingham, R. E. & Cutrera, J. (1997). Parental divorce and narcissism among college students. *Psychological Reports*, **81**, 877-878.
- Blais, M. A. (1997). Clinician ratings of Five-Factor Model of personality and the DSM-IV personality disorders. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **185**, 388-393.
- Blais, M. A., Hilsenroth, M. J., & Castlebury, F. (1997). Content validity of the DSM-IV borderline and narcissistic personality disorder criteria sets. *Comprehensive Psychiatry*, **36**, 31-37.
- Blais, M. A., Hilsenroth, M. J., Castlebury, F., Fowler, J.C., & Baity, M. R. (2001). Predicting DSM-IV cluster B personality disorder criteria from MMPI-2 and Rorschach data: A test of incremental validity. *Journal of Personality Assessment*, **76**, 150-168.
- Bradley, R., Heim, A. K., & Westen, D. (2005). Transference

- patterns in the psychotherapy of personality disorders: Empirical investigation. *British Journal of Psychiatry*, **186**, 342-349.
- Brunton, J. N., Lacey, J. H., & Waller, G. (2005). Narcissism and eating characteristics in young nonclinical women. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **193**, 140-143.
- Bushman, B., & Baumeister, R.F. (1998). Threatened egoism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression : Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 219-229.
- Campbell, W. K., Rudich, E. A., & Sedikides, C. (2002). Narcissism, self-esteem, and the positivity of self-views: Two portraits of self-love. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 358-368.
- Carroll, L., Hoenigmann-Stovall, N., Whitehead III, G. I. (1996). Interpersonal congruences of narcissism. *Psychological Reports*, **79**, 1267-1272.
- Carter, J. D., Joyce, P. R., Mulder, R. T., Sullivan, P. F., & Luty, S. E. (1999). Gender differences in the frequency of personality disorders in depressed outpatients. *Journal of Personality Disorders*, **13**, 67-74.
- Casillas, A., & Clark, L. A. (2002). Dependency, impulsivity, and self-harm: Traits hypothesized to underlie the association between cluster B personality and substance use disorders. *Journal of Personality Disorders*, **16**, 424-436.
- Coid, J. W. (1999). Aetiological risk factors for personality disorders. *British Journal of Psychiatry*, **174**, 530-538.
- Cramer, P. (1999). Personality, personality disorders, and defense mechanisms. *Journal of Personality*, **67**, 535-554.
- Dickinson, K. A., & Pincus, A. L. (2003). Interpersonal analysis of grandiose and vulnerable narcissism. *Journal of Personality Disorders*, **17**, 188-207.
- Ehrenberg, M. F., Hunter, M., & Elterman, M. F. (1996). Shared parenting agreements after marital separation: The role of empathy and narcissism. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **64**, 808-818.
- Eyring III, W. E., & Sobelman, S. (1996) Narcissism and birth order. *Psychological Reports*, **78**, 403-406.
- Farwell, L., & Wohlwend-Lloyd, R. (1998). Narcissistic processes : Optimistic expectations, favorable self-evaluations, and self-enhancing attributions. *Journal of Personality*, **66**, 65-83.
- Fossati, A., Beauchaine, T. P., Grazioli, F., Carretta, I., Cortinovis, F., & Maffei, C. (2005). A latent structure analysis of Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Forth Edition, narcissistic personality disorder criteria. *Comprehensive Psychiatry*, **46**, 361-367.
- Fukunisi, I., Nakagawa, T., Nakamura, H., Li, K., Hua, Z. Q., & Kratz, T. S. (1996). Relationships between type A behavior, narcissism, and maternal closeness for college students in Japan, The United States of America, and The People's Republic of China. *Psychological Reports*, **78**, 939-944.
- Grilo, C. M., Becker, D. F., Edell, W. S., & McGlashan, T. H. (2001). Stability and change of DSM-III-R personality disorder Dimensions in adolescents followed up 2 years after psychiatric hospitalization. *Comprehensive Psychiatry*, **42**, 364-368.
- Gunderson, J. G. & Ronningstam, E. (2001). Differentiating narcissistic and antisocial personality disorders. *Journal of Personality Disorders*, **15**, 103-109.
- 日比野桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富二雄 (2005). 中学生における怒り表出行動とその抑制要因——自己愛と規範の視点から心理学研究, **76**, 417-425.
- Holdwick Jr, D. J., Hilsenroth, M. J., Castlebury, F. D. & Blais, M. A. (1998). Identifying the unique and common characteristics among the DSM-IV antisocial, borderline, and narcissistic personality disorders. *Comprehensive Psychiatry*, **39**, 277-286.
- Jones, A. (2005). An examination of three sets of MMPI-2 personality disorder scales. *Journal of Personality Disorders*, **19**, 370-385.
- 角田 豊 (1998). 共感性と自己愛傾向の関連——共感経験尺度 (EESR) と自己愛人格目録 (NPI) を用いて 心理臨床学研究, **16**, 129-137.
- 葛西真記子 (1999). 日本版「誇大感 (Grandiosity)」欲求尺度作成の試み——Kohutの自己愛論にもとづいて—— カウンセリング研究, **32**, 134-144.
- Ladd, E. R., Welsh, M. C., Vitulli, W. F., Labbé, E. E., & Law, J. G. (1997) Narcissism and causal attribution. *Psychological Reports*, **80**, 171-178.
- Lapsley, D. K., & Aalsma, M. C. (2006). An empirical typology of narcissism and mental health in late adolescence. *Journal of Adolescence*, **29**, 53-71.
- Lavan, H., & Johnson, J. G. (2002). The association between axis I and II psychiatric symptoms and high-risk sexual behavior during adolescence. *Journal of Personality Disorders*, **16**, 73-94.
- Lehoux, P. M., Steiger, H., & Jabalpurilawa, S. (2000). State/trait distinctions in bulimic syndromes. *International Journal of Eating Disorders*, **27**, 36-42.
- McCullough, M. E., Emmons, R. A., Kilpatrick, S. D., & Mooney, C. N. (2003). Narcissists as "Victims" : The role of narcissism in the perception of transgressions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 885-893.
- McHoskey, J. (1995). Narcissism and Machiavellianism. *Psychological Reports*, **77**, 755-759.
- Miller, J. D., Pilkonis, P. A., & Clifton, A. (2005). Self- and other-reports of traits from the Five-Factor Model: Relations to personality disorder. *Journal of Personality Disorders*, **19**, 400-419.
- Montebarocci, O., Surcinelli, P., Baldaro, B., Trombini, E., &

- Rossi, N. (2004). Narcissism versus proneness to shame and guilt. *Psychological Reports*, **94**, 883-887.
- Morf, C. C., Weir C., & Davidov, M. (2000). Narcissism and intrinsic motivation: The role of goal congruence. *Journal of Experimental Social Psychology*, **36**, 424-438.
- Oashi, O. (2004). Relation of type A behavior and multidimensional-ly measured narcissistic personality of Japanese university students. *Psychological Reports*, **94**, 51-54.
- Oltmanns, T. F., Gleason, M. E. J., Klonsky, D. E., & Turkheimer, E. (2005). Meta-perception for pathological personality traits: Do we know when others think that we are difficult? *Consciousness and Cognition*, **14**, 739-751.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, **8**, 1-11.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み——対人関係、適応、友人によるイメージ評定からみた特徴—— 教育心理学研究, **50**, 261-270.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- Ramsey, A., Watson, P. J., Biderman, M. F., & Reeves, A. L. (1996). Self-reported narcissism and parental permissiveness and authoritarianism. *The Journal of Genetic Psychology*, **157**, 227-238.
- Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of personality and Social Psychology*, **54**, 890-902.
- Rathvon, N., & Holmstrom, R. W. (1996). An MMPI-2 portrait of narcissism. *Journal of Personality Assessment*, **66**, 1-19.
- Rhodewalt, F., & Morf, C.C. (1998). On self-aggrandizement and anger: A temporal analysis of narcissism and affective reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 672-685.
- Ronningstam, E., Gunderson, J., & Lyons, M. (1995). Changing in pathological narcissism. *American Journal of Psychiatry*, **152**, 253-257.
- Rothvon, N., & Holmstrom, R.W. (1996). An MMPI-2 portrait of narcissism. *Journal of Personality Assessment*, **66**, 1-19.
- Ruiz, J. M., Smith, T. W., & Rhodewalt, F. (2001). Distinguishing narcissism and hostility: Similarity and differences in Interpersonal Circumplex and Five-Factor correlates. *Journal of Personality Assessment*, **76**, 537-555.
- Sato, T., Sakado, K., Uehara, T., Narita, T., & Hirano. (1999). Personality disorder comorbidity in early-onset versus late-onset major depression in Japan. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **187**, 237-242.
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, **50**, 54-64.
- Soyer, R. B., Rovenpor, J. L., Kopelman, R. E., Mullins, L. S., & Watson, P. J. (2001). Further assessment of the construct validity of four measures of narcissism: Replication and extension. *The Journal of Psychology*, **135**, 245-258.
- Steinberg, B. E., & Shaw, R. J. (1997). Bulimia as a disturbance of narcissism: Self-esteem and the capacity to self-soothe. *Addictive Behaviors*, **22**, 699-710.
- Steiger, H., Jabalpurwala, S., Champagne, J. & Stotland, S. (1997). A controlled study of trait narcissism in anorexia and bulimia nervosa. *International Journal of Eating Disorders*, **22**, 173-178.
- Stormberg, D., Ronningstam, E., Gunderson, J., & Tohen, M. (1998). Brief communication : Pathological narcissism in bipolar disorder patients. *Journal of Personality Disorders*, **12**, 179-185.
- Stuart, S., Pfohl, B., Battaglia, M., Bellodi, L. Grove, W. & Cadoret, R. (1998). The cooccurrence of DSM-III-R personality disorders. *Journal of Personality Disorders*, **12**, 302-315.
- Stucke, T. S., & Sporer, S. L. (2002). When a grandiose self-image in threatened: Narcissism and self-concept clarity as predictors of negative emotions and aggression following ego-threat. *Journal of Personality*, **70**, 509-532.
- Sturman, T. D. (2000). The motivational foundations and behavioral expressions of three narcissistic styles. *Social Behavior and Personality*, **28**, 393-408.
- Tedlow, J., Leslie, V., Keefe, B. R., Alpert, J., Nierenberg, A. A., Rosenbaum, J. F., & Fava, M. (1999). Axis I and axis II disorder comorbidity in unipolar depression with anger attacks. *Journal of Affective Disorders*, **52**, 217-223.
- Watson, D. C., & Sinha, B. K. (1998). Comorbidity of DSM-IV personality disorders in a nonclinical sample. *Journal of Clinical Psychology*, **54**, 773-780.
- Westen, D., Shedler, J. S., Durrett, C., Glass, S., & Martens, A. (2003). Personality diagnoses in adolescence: DSM-IV Axis II diagnoses and an empirically derived alternative. *American journal of Psychiatry*, **160**, 952-966.
- Wiehe, V. R. (2003). Empathy and narcissism in a sample of child abuse perpetrators and comparison sample of foster parents. *Child Abuse & Neglect*, **27**, 541-555.
- Witte, T, H., Callahan, K. L., Perez-Lopez, M. (2002). Narcissism and anger: An exploration of underlying correlates. *Psychological Reports*, **90**, 871-875.
- 湯川進太郎 (2003). 青年期における自己愛と攻撃性——現実への不適応と虚構への没入をふまえて—— 犯罪心理学研究, **41**, 27-35.
- Zanarini, M. C., Skodol, A. E., Bender, D., Dolan, R., Sanislow, C., Schaefer, E., Morey, L. C., Grilo, C. M., Shea, M. T., McGlashan, T. H., & Gunderson, J. G. (2000). The collaborative

longitudinal personality disorders study: Reliability of Axis I and II diagnoses. *Journal of Personality Disorders*, **14**, 291-299.

参照文献

- Alden, L. E., Wiggins, J. S., & Pincus, A. L. (1990). Construction of circumplex scales for the Inventory of Interpersonal Problems. *Journal of Personality Assessment*, **55**, 521-536.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津井成介・大声治・坂井明子 (1999). 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.
- Battacchi, M. W., Codispoti, O., & Marano, G. F. (1994). Shame and guilt: Toward a phenomenological and operational definition. In B. de Raad, W. K. B. Hofstee, & G. L. van Heck (Eds.), *Personality pathology in Europe*. Vol. 5. Tilburg: Tilburg University. pp.242-249.
- Bavolek, S. J. (1984). *Handbook for the AAPI Adult-Adolescent Parenting Inventory(AAPI)*. EauClaire, WI: Family Development Resources.
- Beck, A. T., & Steer, R. A. (1984). Internal consistencies of the original and revised Beck Depression Inventory. *Journal of Clinical Psychology*, **40**, 1365-1367.
- Bellak, L. & Goldsmith, L. A. (1984). *The broad scope of ego function assessment*. New York: John Wiley.
- Blake, D. D., Weathers, F. W., Nagy, K. M., Kaloupek, D. G., Gusman, F. D., Charney, D. S., & Keane, T. M. (1995). The development of a clinician administered PTSD scales. *Journal of Traumatic Stress*, **8**, 75-90.
- Buri, J. R. (1989). Self-esteem and appraisals of parental behavior. *Journal of Adolescent Research*, **4**, 33-49.
- Buss, A. H., & Perry, M. (1992). The Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 452-459.
- Christie, R. A., & Geis, F. L. (1979). *Studies in Machiavellianism*. New York: Academic Press.
- Clark, L. A. (1993). *Manual for schedule of adaptive and nonadaptive personality*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Conte, H. R., Plutchik, R., Karasu, T. B., & Jerrett, I. (1980). A self-report borderline scale: Discriminative validity and preliminary norms. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **168**, 428-435.
- Cook, W. W., & Medley, D. M. (1954). Proposed hostility and pharisaic-virtue scales for the MMPI. *Journal of Applied Psychology*, **28**, 414-418.
- Coolidge, F., & Merwin, M. (1992). Reliability and validity of the Coolidge Axis-II Inventory: A new inventory for the assessment of personality disorders. *Journal of Personality Assessment*, **59**, 223-238.
- Costa, P. T., & McCrae, R. R. (1985). *The NEO personality Inventory manual*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources, Inc.
- Coyne, J. C. (1976). Depression and the response of others. *Journal of Abnormal Psychology*, **85**, 186-193.
- Cramer, P. (1987). The development of defense mechanisms. *Journal of Personality*, **55**, 597-614.
- Cristenson, R. M. & Wilson, W. P. (1985). Assessing pathology in the separation-individuation process by an inventory. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **173**, 561-565.
- Davis, M. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- Davis, M. H. (1983). The effects of dispositional empathy on emotional reactions and helping: A multidimensional approach. *Journal of Personality*, **51**, 167-184.
- Derogatis, L. R., Lipman, R. S., Rickels, K., Uhlenhuth, E. H., & Covi, L. (1974). The Hopkins symptom checklist(HSCL): A self-report inventory. *Behavioral Science*, **19**, 1-15.
- Dornbusch, S. M., Ritter, P. H., Leiderman, P. H., Roberts, D. F., & Fraleigh, M. J. (1987). The relation of parenting style to adolescent school performance. *Child Development*, **58**, 1255-1257.
- Fava, M., Rosenbaum, J. F., McCarthy, M. K., Pava, J., Steingard, R. J., & Bless, E. (1991). Anger attacks in depressed outpatients and their response to fluoxetine. *Psychopharmacology bulletin*, **27**, 275-279.
- First, M. B., Spitzer, R. L., Gibbon, M., & Williams, J. B. W. (1995). The Structured Clinical Interview for DSM-III-R Personality Disorders(SCID-II), part I: Description. *Journal of Personality Disorders*, **9**, 83-91.
- First, M., Spitzer, R. L., Gibbon, M. & Williams, J. B. W. (1996). *Structured Clinical Interview for DSM-IV Axis I Disorders*. New York: New York State Psychiatric Institute, Biometrics Research Department.
- First, M., Spitzer, R. L., Gibbon, M., Williams, J. B. W., & Benjamin, L. (1994). *Structured Clinical Interview for DSM-IV Axis II Personality Disorders(SCID-II), Ver. 2.0.* New York: New York State Psychiatric Institute, Biometrics Research Department.
- Garner, D. M. (1991). *Eating Disorder Inventory—2, professional manual*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- Goldberg, L. (1992). The development of markers for Big-Five factor structure. *Psychological Assessment*, **4**, 26-42.
- Gunderson, J., Ronningstam, E., & Bodkin, A. (1990). The diagnostic interview for narcissistic patients. *Archives of General Psychiatry*, **47**, 676-680.
- Hamilton, M. (1960). A rating scale for depression. *Journal of neurology, neurosurgery, and psychiatry*, **23**, 56-62.
- Hamman, C. L., & Peters, S. D. (1978). Interpersonal consequ-

- ences of depression: Responses to men and women enacting a depressed role. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 322-332.
- 秦 一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成. *心理学研究*, **61**, 227-234.
- Hendin, H. M., & Cheek, J. M. (1997). Assessing hypersensitive narcissism: A reexamination of Murray's narcissism scale. *Journal of Research in Personality*, **31**, 588-599.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 青年期における対人不安意識の発達の变化. *心理臨床学研究*, **14**, 448-445.
- 伊藤美奈子 (1995). 個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討. *教育心理学研究*, **41**, 293-301.
- Jackson, D. N. (1974). *Manual for the Personality Research Form*. Goshen, NY: Research Psychology Press.
- Janis, I. L., & Field, P. D. (1959). Sex differences in factors related to persuasibility. In C. I. Hovland & I. L. Janis(Eds.), *Personality and persuasibility*. New Haven: Yale University Press, pp.55-58,300-302.
- Jenkins, C. D., Roseman, R. H., & Friedman, M. (1967). Development of an objective psychological test for the determination of the coronary-prone behavior pattern in employed men. *Journal of Chronic Disease*, **20**, 371-379.
- Lapan, R., & Patton, M. J. (1986). Self-psychology and the adolescent process: Measures of pseudoautonomy and peer-group dependence. *Journal of Counseling Psychology*, **33**, 136-142.
- Levitt, E. E., & Gotts, E. E. (1995). *The clinical application of MMPI special scales(2nd ed.)*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Livesley, W. J., Jackson, D. N., & Schroeder, M. L. (1989). A study of the factorial structure of personality pathology. *Journal of Personality Disorders*, **3**, 292-306.
- Loranger, A. W. (1988). *Personality Disorder Examination*. Yonkers, NY: DV Communications.
- Lowry, R., Holtzman, D., Truman, B. I., Kann, L., Collins, J. L., & Kolbe, L. J. (1994). Substance use and HIV-related sexual behaviors among U.S. high school students: Are they related? *American Journal of Public Health*, **84**, 1116-1120.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 (1990). 青年の恋愛に関する測定尺度の構成. *東京都立川短期大学紀要*, **23**, 12-23.
- Morey, L. C., Waugh, M. H., & Blashfield, R. K. (1985). MMPI scales for DSM-III personality disorders: Their derivation and correlates. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 245-251.
- Murray, H. A. (1938). *Explorations in personality*. New York: Oxford University Press.
- (マレー, H. A. 外林大作 (訳) (1961). パーソナリティ I 誠信書房)
- 中川泰彬・大坊都夫 (1985). 日本版GHQ精神健康調査票手引. 日本文化科学社
- Novaco, R. W. (1994). Anger as a risk factor for violence among the mentally disordered. In J. Monahan & H. J. Steadman (Eds.), *Violence and mental disorder: Developments in risk assessment*. Chicago, IL: University of Chicago Press. Pp.21-59.
- O'Brien, M. L. (1987). Examining the dimensionality of pathological narcissism: Factor analysis and construct validity of the O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory. *Psychological Reports*, **61**, 499-510.
- O'Brien, E. J., & Epstein, S. (1988). *The Multidimensional Self-Esteem Inventory, professional manual*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- 岡崎美奈子・大芦 治・山崎久美子 (1995). TYPE A行動パターン尺度の再検討. *日本心理学会第59回大会発表論文集*, **56**.
- 岡田 努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察. *青年心理学研究*, **5**, 43-55.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, **52**, 1-10.
- Pearlman, S. B. (1988). *An empirical measure of self-preservation and care of the self*. Unpublished doctoral dissertation, California School of Professional Psychology, Alameda, CA.
- Peterson, C., Semmel, A., von Bayer, C., Abramson, L., Metalsky, G., & Seligman, M. (1982). The Attributional Style Questionnaire. *Cognitive Therapy and Research*, **6**, 287-300.
- Phares, E. J., & Erskine, N. (1984). The measurement of selfism. *Educational and Psychological Measurement*, **44**, 597-608.
- Robbins, S. B. (1989). Validity of the superiority and goal instability Scales as measures of defects in the self. *Journal of Personality Assessment*, **53**, 122-132.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 佐方哲彦 (1986). 自己愛人格の心理測定——自己愛人格目録 (NPI) の開発——. *和歌山県立医科大学進学課程紀要*, **16**, 63-76.
- Sansone, R. A., Wiederman, M. W., & Sansone, L. A. (1998). The self-harm inventory(SHI): Development of a scale for identifying self-destructive behaviors and borderline personality disorder. *Journal of Clinical Psychology*, **54**, 973-983.
- Saucier, G. (1994). Mini-markers: A brief version of Goldberg's unipolar big-five markers. *Journal of Personality Assessment*, **63**, 506-516.
- Serkownek, K. (1975). *Subscales for Scales 5 and 0 of Minnesota Multiphasic Personality Inventory*. Unpublished materials.
- Smith, M. C., & Thelen, M. H. (1984). Development and validation of a test for bulimia. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **52**, 863-872.
- Spitzer, R. L., & Williams, E. (1983). *Structured Clinical Interview for DSM-III Disorders(SCID)*. New York: Biometric Research Department, New York State Psychiatric Institute.
- Spitzer, R. L., Williams, J. B. W., Gibson, M., & First, M. B. (1989). *Structured clinical interview for DSM-III-R——Patient Edition*. New York: Biometrics Research Department, New

York State Psychiatric Institute.

- Spitzer, R. L., Williams, J. W. B., Gibbon, M., & First, M. B. (1990). *Structured Clinical Interview for DSM-III-R: Personality Disorders (SCID-II)*. New York: Biometrics Research Department, New York State Psychiatric Institute.
- Spitzer, R. L., Williams, J. B. W., Kroenke, K., Linzer, M., Gryg, F. V., Hahn, S. R., Brody, D., & Johnson, J. G. (1994). The PRIME-MD 1000 Study: Validation and clinical utility of a new procedure for diagnosing mental disorders in primary care. *Journal of the American Medical Association*, **272**, 1749-1756.
- Stangl, D., Pfohl, B., Zimmerman, M., Bowers, W., & Corenthal, C. (1985). A structured interview for the DSM-III-R personality disorders: A preliminary reports. *Archives of General Psychiatry*, **42**, 591-596.
- Steers, R. M., & Braunstein, D. N. (1976). A behaviorally-based measure of manifest needs in work settings. *Journal of Vocational Behavior*, **9**, 251-266.
- Taylor, C. M. (1995). *The profile of narcissistic dispositions(POND)*. Unpublished doctoral dissertation, University of British Columbia.
- Trapnell, P. D., & Wiggins, J. S. (1990). Extension of interpersonal adjective scales to include the Big Five Dimensions of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 781-790.
- 内田裕之 (1995). 大学生の世間意識と対人恐怖的心性との関連 心理臨床学研究, **13**, 75-84.
- Widiger, T. A., Mangine, S., Corbitt, E. M., Ellis, C. G., & Thomas, G. V. (1995). *Personality Disorder Interviews-IV: A semi-structured interview for the assessment of personality disorders*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- Wink, P., & Gough, H. G. (1990) New narcissism scales for the California Personality Inventory and MMPI. *Journal of Personality Assessment*, **54**, 446-462.